宇宙生命哲学

ことはじめ

70

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

日本被団協がノーベル平和賞受賞

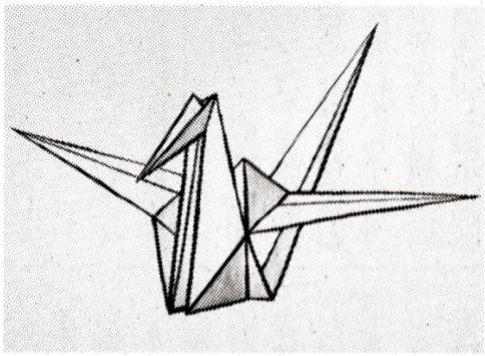
2024年10月11日、ノルウエーのノーベル委員会は、2024年度のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）に与えると発表し、世界中を驚かせた。受賞の理由は、「長年に渡り核兵器のない世界の実現に尽力してきたことと、核兵器が2度と使われてはならない（核のタブー）と証言してきたこと」である。当初、緊迫したウクライナ情勢やパレスチナ情勢の下で平和活動を進めてきた個人やグループが本命と見られており、「日本被団協」は、全く下馬評に上がっていなかった。

「現在進行中の戦争で核兵器を使用するとの脅迫がされている」ことが、今回の被団協の受賞理由であるというが、選考の舞台裏ではどのようなドラマがあったのだろうか。

選考委員長のヨルゲン・ワトネ・フリドネス氏は1984年生まれ。1990年代に、自国にとって地球の反対側に位置する日本の被爆者の話を知ることができたという。「記憶」とその継承の重要性を行動の原点として様々な活動に関わり、最年少でノーベル委員会入りして、今年、委員長に就任した。

「記憶を紡ぐカルチャーが強固なことは、国が正しい方向に進むための前提条件で、国際社会の正常な秩序を保つためにも重要だ」と朝日新聞の電話インタビューに答えている。

歴史に残る悲惨な出来事も、時間と共に記憶が薄れ、歴史は繰り返される。生身の「記憶」の証言者が、程なく世の中から消滅してしまうという危機感が、受賞理由の全文面に漂っている。高齢の被爆者たちは、被爆した苦痛を唯一無二の「記憶」として社会に訴え続けてこられた。その生身の経験とメッセージが、若い世代に継承されていることに期待が寄せられている。受賞の知らせを受ける高齢の被団協役員の隣に、平和大使の女子高校生たちが座している情景は、印象深かった。「記録」の重要性は云うに及ばず、「記憶」の底知れぬ力に光を当てたことが、今回のノーベル賞をより意義深いものにしていると思う。



klas Elmehed © Nobel Prize Outreach

日本被団協のロゴ（ノーベル財団HPより）

人類の文明は、今、発展途上にある。世界の平和のために、心ある若者たちが勇気を持って立ちあがり、行動を始めている。私は今年83歳になるが、地上に原子爆弾が投下された時、既に1人の人間としてこの地球上に立っていたことに思いを馳せる。人類が犯した愚行に対してある種の責任を感じながら、残された人生を世界平和のために尽くしたいと思っている。